

植民地期朝鮮における女教師の社会教育活動

李 正連*

はじめに

近年植民地期朝鮮の教師に関する研究が増えているが、女教師に関する研究は極めて少ない。それは、植民地期の女教師数が少なかったということとも関連があるといえよう。「男女教員数の最近統計に依れば、現在公立普通学校に勤務する男教員が 5,182 人、女教員は 372 人、その比率は女が男の 100 分の 7 に過ぎない」¹という 1920 年代後半の新聞記事にみられるように、当時の女教師数は非常に少なかったようである。1930 年代に入り農村振興運動の展開過程において女子教育の重要性が認識され、女子教育を担うには女教師が適任であるという認識から、1935 年に朝鮮で初めての独立した女教師養成機関として「京城女子師範学校」が創設されるようになるものの、公立普通学校の女教師の比率はあまり伸びず、1941 年にやっと 2 割を超える程度であった²。

植民地期朝鮮人児童の官公私立普通学校への就学率は、1912 年 2.0%、1922 年 9.6%、1932 年 17.1%、1942 年 48.2%へと上昇していくが³、1940 年代になっても半数以上の児童は就学できない状況であった。その中でも女子児童の不就学率は非常に高く、1933 年までの女子児童の完全不就学率は 9 割を超えており、1940 年代に入っても 6 割をはるかに超えていた⁴。女子児童の不就学率が高い理由としては、根強い旧来の男尊女卑思想や経済的困難等が挙げられるが、1919 年の三・一運動以後、民衆啓蒙運動が展開される中、女性教育の必要性も提起され、実際女性の教育要求も高まっていった⁵。ところが、その教育要求を収容する学校施設の不足によって、女子教育の大半は夜学や講習所などの私設の教育施設が担っていた。私設教育施設の教育を担ったのは、主に地域の有識者をはじめ、青年団体や宗教団体等であるが、学校教員も不就学児童に対して教育を行っていた。特に、女教師の場合は、不就学児童のための教育のみならず、婦人への識字教育や啓蒙活動（講演や執筆活動など）をも行っていた。しかし、植民地期朝鮮の女教師研究、とりわけ女教師の学校外での教育活動、つまり社会教育活動については短編的な研究しか行われてこなかった。

そこで、本研究では、初歩的な考察ではあるが、当時の朝鮮人女教師の実態と役割を女教師の社会教育活動から考察することで、朝鮮社会における女教師という集団の一断面を明らかにしたい。

1. 植民地期朝鮮の女教師に関する先行研究

植民地期朝鮮の教師に関する研究は 2000 年代に入ってから増加を見せている。代表的な研究として、朴永奎⁶、山下達也⁷、金広珪⁸、チャン・インモ⁹、パク・クァンスン¹⁰等の研究が挙げられる。これらの研究では、主として初等及び中等教員の養成や任用、人事、管理体制などの教員政策に関する内容を考察しており、女教師に関しては部分的にしか触れていない。例えば、山下は、植民地朝鮮の初等教員を検討する中で、教員社会における性差と、女子児童学級の担当や地域の朝鮮女性に対する「社会教化」活動を担う女性教員の役割について明らかにしているものの¹¹、その検討対象は公立普通学校教員に限っている。

しかし、当時女教師の学校外での活動、つまり社会教育活動は、公立普通学校教員のみならず、高

* 本センター研究員・東京大学大学院教育学研究科准教授

等女子普通学校やミッション系の私立女学校のような中等及び高等教育機関に勤める女教師も多く行っていた。とくに、朝鮮人女教師は不就学児童や婦人たちのための夜学や講習書における識字教育をはじめ、新聞や雑誌への執筆活動、講演等を通じた女性向けの啓蒙活動も広く展開していた。このような活動は三・一運動以後多く組織された各種の女性団体を中心に行われたが、その主要メンバーの大半は近代学校教育を受けたエリート層の女性たち、いわゆる「新女性」であった。当時の代表的な新女性¹²や彼女たちの活動した諸女性団体¹³に関する研究は多く行われてきたが、その新女性または女性団体の多くの構成員が教師、もしくは教師の経験を持つ女性であったことにはあまり注目されてこなかった。このような点から本研究では、植民地期朝鮮人女教師が学校外で行った社会教育活動に焦点を当て、当時の朝鮮人女教師が果たした社会的役割とその意義について考察したい。

2. 植民地期朝鮮における女教師の三部類と朝鮮人女教師の養成

2.1. 女教師の三部類

朴宣美は、植民地期朝鮮における女教師を大きく三部類に分けているが、それは①欧米からの婦人宣教師、②日本から渡ってきた日本人女教師、③朝鮮で養成された女教師である¹⁴。19世紀末アメリカをはじめ、カナダ、オーストラリア等の欧米からキリスト教の諸教派の女性宣教師が朝鮮に派遣されるようになるが、彼女たちの主な任務の一つが教育であった¹⁵。宣教師たちは、梨花学堂（京城）、培花女学校（京城）、貞信女学校（京城）、協成女子神学校（京城）、正義女学校（平壤）、崇義女学校（平壤）、日新女学校（釜山）、永生女学校（元山）などのような女学校を次々と設立し、女子教育に取り組んだ。

日本人女教師は、日本の師範教育制度によって養成され、朝鮮へ渡った人たちと、初等教育の場合は、朝鮮で実施された師範教育制度によって排出された人びとである。彼女たちは朝鮮人を「日本帝国」の忠良なる臣民として作り出すことと、次世代の植民者（日本人）の育成を担っていた¹⁶。

次の〈表1〉は、1929年～1943年の三部類の女教師の推移である。初等教育では日本人と朝鮮人に差があまりないが、中等教育においては日本人女教師が圧倒的に多い。朝鮮には中等学校の教師を養成する高等師範教育機関が整っておらず、朝鮮人の場合は主に日本やアメリカ留学等を経験した者が中等学校の教師になったからである¹⁷。

〈表1〉朝鮮における女教師数の推移

年度	初等教育				中等教育				高等教育				合計
	日本人	朝鮮人	外国人	小計	日本人	朝鮮人	外国人	小計	日本人	朝鮮人	外国人	小計	
1929	1,011	928	51	1,990	232	53	14	299	2	5	11	18	2,307
1931	1,007	1,005	57	2,069	257	74	15	346	3	10	15	28	2,443
1932	994	1,024	39	2,057	263	131	36	430	14	9	13	36	2,523
1933	1,038	1,081	38	2,157	291	132	40	463	2	10	15	27	2,647
1934	1,055	1,217	27	2,299	281	138	31	450	2	12	14	28	2,777
1936	1,165	1,412	28	2,605	276	138	33	447	5	11	12	28	3,080
1937	1,258	1,660	26	2,944	319	145	26	490	6	11	12	29	3,463

1938	1,362	1,750	14	3,126	332	182	22	536	11	20	13	44	3,706
1940	2,153	2,462	3	4,618	374	177	25	576	24	30	12	66	5,260
1941	3,040	3,000	2	6,042	401	195	3	599	30	34	2	66	6,707
1942	3,644	3,177	3	6,824	459	187	-	646	33	59	1	93	7,563
1943	4,050	3,256	-	7,306	426	167	-	593	47	19	-	66	7,965

出典) 朴宣美「帝国の女教師たち—朝鮮で教えた女教師たち—」江藤秀一編『帝国と文化—シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで—』春風社、2016年、pp.326-327。

2.2. 朝鮮人女教師の養成

朝鮮人女教師は、①朝鮮総督府の女子師範教育によって養成された女教師と、②日本・アメリカ・中国などで留学した経験を持つ女教師（この場合は中等教育機関で教鞭を執ることが多い）、③欧米から来た婦人宣教師によって養成された女教師に大きく分けることができる。

朝鮮総督府の女子師範教育機関としては、1914年、京城女子高等普通学校に設置された師範科と、1919年平壤女子高等普通学校に設置された師範科があげられる。その後、1922年度から男子普通学校の1年生学級のみならず女教師を任用することとなり、各道立師範学校に講習科（修業年限半年または1年）を設置し、女教師を養成するようになる。その中、1925年「高等普通学校及び女子高等普通学校の師範科生徒に支給された学資給与の件」が廃止され、これらの学校での教員養成は事実上幕を閉じることとなる。一方、同年京城師範学校に女子師範科（修業年限1年）が設置されるようになる。その後、1935年に初めて独立した女子師範教育機関として官立京城女子師範学校が設立され、講習科（修業年限1年）、演習科（修業年限2年）、尋常科（修業年限4年）から学生募集が行われた¹⁸。同校の初代校長である高橋濱吉は、当時の女教員に期待されることについて、次のように述べている。

「一般的校務の処理に就いては、固より教員になるが故に、男教員と何等異なる所は無いのであるが、女教員は更に女性としての特色を発する所がなければならぬ」としながら、「要之女教員に対する期待は（一）学校における主婦的、母姉的存在、（二）豊醇なる情操と鋭敏なる感受性の發揮、（三）周到緻密なる注意力、（四）教科経営上の独自の使命、（五）養護に対する責務等であらう」と挙げている¹⁹。その後、1938年には公州女子師範学校が、1944年に元山女子師範学校が開校するようになった。

次に、海外留学の経験を持つ女教師は、その多くが中等学校または専門学校で教鞭を取ることが多かった。留学先としては日本とアメリカが最も多いが、留学から帰国後その大半が学校の教師として働いた点においては共通している²⁰。当時女性が職に就けることは非常に限られており、その中で教職が比較的に入りやすい就職先であったからである。

女教師の中には2か国以上で留学した経験をもつ人もおり、その活動範囲も学校内にとどまらず、女性運動や農村事業へ広がっていった。例えば、当時の代表的なエリートの新女性として知られる黄愛徳は、梨花学堂を卒業し、平壤の崇義女学校で数学教師として勤めるが、1918年日本へ渡り、東京女子医学専門学校で修学するようになる。しかし、独立運動で検挙され、朝鮮に戻るようになるが、梨花学堂大学部を卒業し、梨花女子専門学校の教授となる。その後1925年に渡米し、カリフォルニア大学で教育学修士学位を取得、ペンシルバニア大学で農村事業を研究してから1929年に帰国する。帰国後は協成女子神学校の教授に就任し、農村事業指導教育科を新設して農村事業に取り組むとともに、女性啓蒙事業や基督教伝道事業にも励んだ²¹。培花女学校の教師と舎監を務めた金美理士²²も中国・アメリカでの留学経験を持っており、学校教師の任務だけではなく、女性啓蒙運動をはじめ、朝鮮女子教育会の組織や槿花女学校の設立など、活動の範囲を拡大していった²³。その他、貞信女学校と須皮

亜女学校で教鞭を執った金弼礼や金瑪利亜、良垓学校をはじめ、永明女学校、梨花女堂で教えた任永信も日本とアメリカで留学をしている。

最後に、欧米から来た婦人宣教師によって養成された朝鮮人女教師は、婦人宣教師が開設した（梨花学堂中等科のような）中等課程の女学校で養成された。卒業後、彼女たちは全国各地のデイ・スクール（初等学校レベルの平日（昼間）学校）の教師となって子どもたちを教えるとともに、夜学や日曜学校、聖經（バイブル）学校等でも不就学児童と夫人たちに対して教育を行うなど、教会や地域においてもリーダー的な役割を果たしていた²⁴。

3. 朝鮮人女教師の社会教育活動

3.1. 公立学校の女教師

筆者は、これまでの研究において、植民地期公立普通学校を中心として行われた社会教育（社会教化）について考察し、三・一運動を起点としてその方針に変化があったことを明らかにしている。すなわち、1910年代は朝鮮人の教化を図るため、通俗講演会や「国語（日本語）」講習会、卒業生講習会などの事業を行うとともに、公立学校への入学忌避現象を解消するため、展覧会や父兄会、学芸会、運動会等のような学校教育の成果やその先進性を見せ、宣伝効果も図っていた。一方、1920年代に入ると、三・一運動後高まる朝鮮民衆の教育要求に応えつつ、かつ抗日運動を防止するための思想善導・民衆教化により力を入れるようになる。つまり、公立普通学校の教師は児童を教える仕事のほか、一般民衆を啓発・善導すべき社会教育までを担う二重負担を抱えていたのである²⁵。

基本的な方針として女子児童の教育にあたっていた女教師は、地域住民の社会教化においても、女性を対象とする活動を担当していたとみられる²⁶。例えば、「江原道横城郡では近来婦人界の向学心が起こり、同郡公立普通学校内に婦人夜学講習会を設置し、教科目は国語（日本語—引用者注）、朝鮮語、書簡、文法、家事、算盤などであり、普通学校の女訓導が担任教授をするという」²⁷や「黄海道平山郡新南川公立小学校では市内の婦女者 17 歳以上の志願者 60 余名を選抜して去る 10 月 20 日から 12 月 10 日までの 2 か月間国語講習会を開催し、同校講堂で毎日午後 8 時から 3 時間を同校の女子訓導らが交代で熱心に教授するそうだが、受講生も一人も欠席せず、毎晩出席して熱心に勉強していて、非常に大きく期待されている。設立者の同校清水校長の指導方法が徹底しているということから一般から称賛されることが多い」²⁸にみられるように、公立普通学校で主婦や婦女者向けに各種の講習会を実施することは全国各地で広く行われており²⁹、その際の教育は女教師に主に任されていたのである。また、「咸南利原郡公立普通学校教師の金衡玉嬢は、女学生の教育熱が少ないことを痛嘆し、次の新学期に女学生を多数募集して教えるつもりで、今から各戸に直接訪問して入学させるよう勧誘することに尽力」³⁰するという文面から、当時の女教師は女子児童への就学督励も行っていたことがうかがえる。

また、「公立普通学校の卒業生に対し学校が勤労的訓練を与へる」³¹ために 1927 年から始まった「卒業生指導」という施策においても公普校の教師がその任務を果たしていた。その具体的な事例が、次の新聞記事によく紹介されている。

黄海道谷山公普校では卒業生指導に対して各方面から努力してきたが、今年からは一般卒業生に肉体的労働の精神を涵養させるため、午後になれば校長以下職員一同が総出動して卒業生の家を巡回しながら、実際田畑に行って日没まで移秧（田植え—引用者）と畑で除草させるなど、一般農作の方法等を実際に教えるという³²。

以上のように、当時の公立普通学校の教師たちは学校の業務以外にも、地域の人々に対する識字教育や農作法などの業務も担う二重負担を背負っており、一部ではそれに対する批判の声もあった³³。

3.2. 私立学校の女教師

植民地期朝鮮における私立学校は、概ね一般学校と宗教学校に分けられる。一般学校は、旧皇室・官僚や地主・資本家たちによって設立され、宗教学校は主に基督教のメソジスト派と長老派宣教財団によって設立された学校である³⁴。当時社会活動を活発に行っていた朝鮮人女教師はその多くが私立学校、とりわけ私立中等学校の教師であり、ミッション系女学校の教師が多かった。代表的な女教師としては、金美理士（培花学堂、槿花女学校）、朴仁徳（梨花学堂、梨花女子専門学校、培花女子高等普通学校）、金瑪利亜（須皮亜女学校、貞信女学校、マルダウィルソン女子神学校）、金弼礼（貞信女学校、須皮亜女学校）、黄愛徳（梨花学堂、協成女子神学校）、金活蘭（梨花学堂、梨花女子専門学校）、方信栄（貞信女学校、梨花女子専門学校）、劉珏卿（貞信女学校）、成義敬（淑明女子高等普通学校）、任永信（良垓学校、永明女学校、梨花女堂）など、当時著名な女性知識人かつ社会運動家が挙げられる。

女教師たちは、学校教師をしながら、一方で女性教育や啓蒙運動に取り組むため、様々な女性関連団体を組織して女性運動を展開していくが、1920年代初めの主な女性団体としては朝鮮女子教育会（1920年）、泰和女子館（1921年）、朝鮮女子青年会（1921年）、朝鮮女子基督教青年会（1922年）、女子苦学生相助会（1922年）などがある³⁵。その主な活動は、講演や執筆活動をはじめ、女性教育のための夜学・講習所、婦人講座、女性運動家の養成、さらに学校の設立などへと発展していく。

例えば、培花学堂の教師だった金美理士は、1920年2月20日、女性の教育機会と啓蒙運動のため、朝鮮女子教育会（1922年から朝鮮女子教育協会）を設立する。金は同教育会の設立について次のように語っている。

朝鮮女子の教育こそ我が社会の最も大きな問題です。（中略）車の両輪のような男女関係が従来と現在は片方へ傾いているので、それを正すためには女子教育が必要だと思います。このような考えから我々数人は昨年朝鮮女子教育会を組織し、未熟ではあるが、今まで事業を展開し続けてきました³⁶。

その主な事業としては、まず婦人夜学講習所を設置し一般女性に対して教育活動を行うことであり、雑誌『女子時論』を発行するとともに、全国巡回講演・公演会を展開し、広く女性啓蒙運動に取り組むことであった。その全国講演・公演会で得た収益を集めて、1923年に槿花学園を設立、1925年には私立各種学校として認可を受け、槿花女学校となった。同校の設立は、外国宣教師や王室、男性先覚者の援助を受けずに、女性によって組織された朝鮮女性教育協会の力だけで実現したという点でその意義は大きい。その後、1934年に同校は槿花女子実業学校として認可（1938年、徳成女子実業学校へ改名）を受け、実業教育機関として発展していく³⁷。

梨花学堂、梨花女子専門学校、培花女子高等普通学校等で教師として勤めていた朴仁徳も、女教師が中心となって組織した社交団体に関わっていた。1926年5月京城市内仁寺洞にある泰和女子館³⁸の社会事業部主催で、京城市内の女子教員倶楽部は梨花及び貞信女子高等普通学校、その他の各学校から10余名の教員が集まって望月倶楽部という社交団体を組織し、毎月一回陰暦15日に集まることとしたので、会名を「望月」とした。〈写真1〉は、泰和女子館で活動する望月倶楽部の様子である。同

倶楽部の「会員の資格は高等女学校卒業程度以上の知識階級の職業女子のみで網羅するとし、趣旨は市内各方面で活動する知識階級の社交団体として親睦を図り、意見の交換を主にする。その他社会事業に協力する」ということであった³⁹。その後、1932年、朴仁徳は黄愛徳や金活蘭等と一緒に、同倶楽部を「職業婦人協会」へ改編するようになるが、それは世界職業婦人協会と連絡を取るためだった⁴⁰。一方、朴は農村女性啓蒙運動にも関わり、農閑期に農村を回って夜学を行い、常識・衛生・育児の知識など生活改善に役立つことを教えるとともに、ハングルも無料で教えていた。同時に農村事業のための組織と指導者の育成を進めるため、1931年10月農村女子事業会を設立する。そして、農村女性修養所を設置し、生活知識普及・協同組合奨励・家庭副業を教えるなどの事業も進めていた⁴¹。

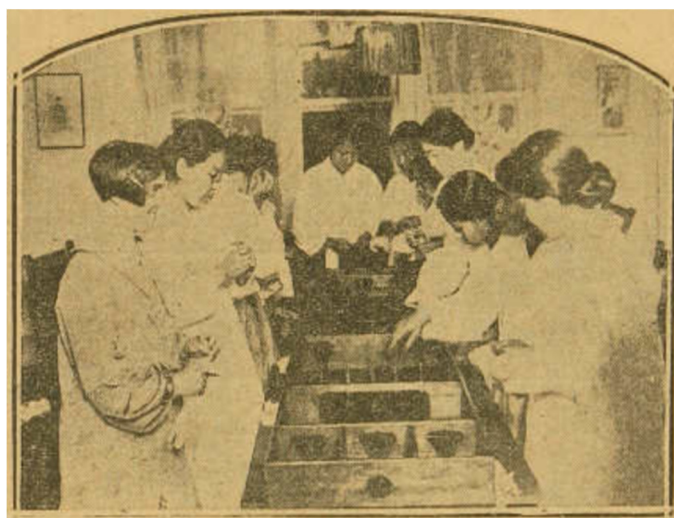
1921年4月18日、女性の文化向上を促進し、生活制度を改善するために設立された朝鮮女性青年会も申謁琲攄、任永信（良垚学校、永明女学校、梨花女堂）、成義敬（淑明女校）、孫貞奎（京城女子高等普通学校）⁴²等の女教師が中心となって組織されており、主な事業としては夜学・講習所の運営と婦人講座（毎週土曜日）の運営、そして婦人たちに実科教育・裁縫教育を行うため、朝鮮女子学院（1930年3月30日、「養賢女学校」として認可）を設立している⁴³。

1927年に女性の団結と地位向上のために設立された槿友会という女性団体は、教師をはじめ、女医、記者、文学者、実業家、宗教関係者など、各分野で活躍している多くの女性によって組織され、解消論が浮上する1931年まで全国に約70支会が設置されていた大きな団体である。同会でも夜学や講演会を通じた識字教育と啓蒙活動を行うとともに、女性の経済的自立及び生活改善（裁縫、西洋刺繍、編物講習会）を支援していた⁴⁴。

そして、ミッション系女学校で修学し、ミッション系女学校の教師になる女教師が多かったこともあり、朝鮮人女教師たちは女子基督教青年会との関係も深かった。例えば、1925年在京女子基督教青年会連合（京城女子基督教青年会ほか四団体）が昼間には余裕のない職業婦人である無産女性の便利を図るため、泰和女子館で毎晩女子労働夜学を設置し、ハングル・算術・英語・編み物などを教えていたが、講師は女学校の女教師が担当していたのである⁴⁵。

その他、各地方の女教師たちも地域の女性たちに対して夜学等を開いて教えていた。例えば、当時の新聞記事によれば、「江原道春川郡礼拝堂では美国宣教師（テイラー氏）と貞明女学堂教師の池達源氏が今般英語夜学会を主催」⁴⁶しており、「釜山女子青年会では、釜山鎮青年倶楽部の後援を得て同倶楽部会館内で婦人夜学会を開設する予定であるが、（略）先生は名誉職として日新女学校女教師の梁漢羅、金基淑ほか1名である」⁴⁷と報じられている。また、京畿道水源に位置する「三一女学校の教師である金温順、崔文順、李載順の三氏は自己の受苦を顧みず、数多くの婦女を教授するようになり、同夜学を開始する」⁴⁸ようになったと記載されており、「黄海道谷山郡花村面桃李里の敬信女塾教員の康金玉女史は去る12月初旬から同里婦女者30余名を同女塾に集めて極めて厳しい寒さにもかかわらず、算術、国漢文など家庭に必要な科目を毎日教え続ける」⁴⁹と伝えている。

つまり、私立学校の女教師たちも公立学校の女教師と同様、もしくはそれ以上の多



〈写真1〉望月倶楽部の活動の様子
（『時代日報』、1926年5月8日）

様な社会教育活動を行っていたのである。なお、朝鮮女性青年会の主要メンバーにもみられるように、女性団体の立ち上げや活動には、私立学校の女教師だけではなく、公立学校の女教師も関わっていた。

3.3. 私設教育施設で活躍する女教師たち

冒頭でも述べたように、朝鮮の公立普通学校への就学率は 1940 年代になっても半数以上の児童は就学できないほど低く、とりわけ女子児童の不就学率は夥しいレベルであった。上述したように、このような状況を受け、学校の女教師たちは夜学や講習所などの私設の教育施設を設置し、不就学児童や婦人たちに対して識字教育を行っていた。

私設教育施設で教育を担当していた人たちは、地方有志、地方官吏、青年会・婦人会・宗教系団体等の諸団体、現役生徒・学生などであるが⁵⁰、女性が多く含まれるのは女子青年会や婦人会などの諸女性団体（宗教系も含む）と現役学生として教育に関わる時である。つまり、正規の学校教師ではないが、当時夜学や講習所、そして基督教系団体の運営する日曜学校や聖經学校等で識字教育や啓蒙活動を担った女性たちが少なからずいた。しかし、この部分については史料の制約もあり、まだ十分には検討されていない。

筆者は、これまで植民地期夜学や講習所で学んだ経験を持つ人々にインタビュー調査を行ってきたが、その過程で極めて少ないものの、当時夜学や講習所で教えていた女教師についても証言を聞くことができた。例えば、1935 年発表された小説『常緑樹』のモデルでもある崔容信は、協成女子神学校に在学していた 1929 年から朝鮮女子基督教青年会聯合会（YWCA）の農村啓蒙事業に関わるようになり、1931 年には YWCA からの派遣教師として京畿道華城郡半月面泉谷村に講習所を設置し、子どもたちへの教育を行った。当時中等学校や専門学校に通う学生たちが農村に入ってハングル普及や農民啓蒙をする動きが YMCA や YWCA のような基督教青年会のみならず、雑誌・新聞社、朝鮮語学会等によっても広く展開されていた。

天道教の運営する朝鮮農民社は、1926 年から帰農運動を実施し、学生たちに夏期休暇中に故郷や農村に行って農民夜学を行い、農民共生組合（1931 年）運動などの農村啓蒙運動を展開するようにしていた。朝鮮日報社と東亜日報社もそれぞれ「文字普及運動」（1929-1934 年）と「ブナロード運動」（1931-1934 年）を立ち上げ、全国規模のハングル普及と農村啓蒙を実施したが、その担い手は主に中等学校や専門学校の学生たちであった。その学生の中には女学生も多数いた。朝鮮日報社の文字普及運動を進める第 4 回「文字普及班」（1934 年）には、好寿敦女子高等普通学校や培花女子高等普通学校等のような女子中等学校が 21 校、そして京城保育専門学校及び梨花女子専門学校の学生たちが隊員として参加しており、東亜日報社のブナロード運動にも毎回諸女学校からの参加があった⁵¹。

実際、当時の新聞には同運動に関する記事が数多く掲載され、全国の活動様子が紹介されていた。〈写真 2〉は、東亜日報社が実施した第 3 回ブナロード運動の活動様子を伝える写真であるが、中学校に通う女学生 4 人が京畿道高陽郡崇仁面敦岩里に啓蒙隊員として入り、1933 年 7 月 20 日午後 8 時から 8 月 10 日午後 10 時まで約 20 日間生徒 69 人（男 16 人、女 53 人）に対して教育を行っていたと報告されている⁵²。また、京畿道長湍郡では同年 7 月 26 日午前 9 時～8 月 16 日午後 1 時に同邑の聖經学校と協力して啓蒙運動をすることになり、聖經学校委員たちと開城女子基督青年会から派遣された好寿敦女子高等普通学校 4 年の女学生 2 名を入れて計 8 人（男先生 3 人、女先生 5 人）の隊員が生徒 86 人（男 35 人、女 51 人）の教育を担っていた。教授科目は、「啓蒙科目、聖經、童話、歴史等を教えており、教材、鉛筆、ノートは無料配布し、班は初等・中等・少年・少女の 4 班に分けて教授」していた⁵³。

地域によっては、女性の教育に力を入れるところもあったが、例えば、京畿道開豊郡では「朝鮮民衆の文明を大変遺憾と思い、6年前から矯風会を組織し、毎年農閑期を利用して男子に限ってハングル講習会を行ってきたが、日用生活には女性の文盲退治がより必要だと感じ、京城協成神学校校長に講師1名をお願いして今回ハングル講習会を開くことになった」と報告している。集まった生徒は男子が5人で、女子が32人であり、6月27日から8月15日まで2か月近く実施していた⁵⁴。さらに、始興郡では講師も生徒30人も全員主婦で構成された講習会が開かれていた⁵⁵。

以上のように、1920年代後半から1930年代前半にかけて行われた農村啓蒙運動の一環として、女学校に通う女学生が農村に派遣され、識字教育や啓蒙活動を担っていたが、その運動は朝鮮総督府の取締によって間もなく中断されるようになる。ところが、その後も基督教教育施設では農村の子どもや婦人たちに対する教育と啓蒙を行うとともに、農村指導者の養成をもしていたようにみられる。筆者のインタビュー調査によれば、教会が運営する講習所で教育を受けた後、1939-41年に同講習所で教師をしつつ、村の各戸を回りながら子どもや婦人を対象に識字教育や啓蒙運動を行った人がいた⁵⁶。しかし、夜学や講習所などの私設教育施設における女教師の活動等についてはまだ考察が不十分であり、今後さらなる研究が求められる。



〈写真2〉高陽郡敦岩里女教員たちの活動
(『東亜日報』1933年7月29日)

4. 新聞・雑誌における女教師たちの執筆活動

植民地期にいわゆる「新女性」と呼ばれていた女教師の主な社会活動としては、先述した学校外での識字教育及び啓蒙活動のほかに、より短期間で広く影響が与えられる執筆活動も挙げることができる。その内容は、教育をはじめ、経済、文化、芸術（美術や音楽）、衛生・健康、育児、結婚・恋愛など多岐にわたる。執筆活動は、1920-30年代に多く見られるが、長い時は約1か月にわたって各界で活躍している新女性の記事を新聞で連載を組んでいる。例えば、『東亜日報』では1921年2月21日から1921年3月10日まで計16回にわたって「新進女流の気焰」という連載を組み、女性団体の会長や教師、医師、画家、記者などとして活動している新女性の記事をほぼ毎日1本ずつ掲載している。その目録は〈表2〉の通りである。

女教師たちの文章に注目してみると、共通して女性の「教育」の必要性が強調されている。梨花学堂の教師である金活蘭は、「文化とは文明や教化を意味する。概ね個人が集まって社会となり、社会が集まって国家となるので、個々人が文明化すれば、その社会が文明化し、その社会が文明化すれば、その国が文明化する。それ故、朝鮮の文化運動を興すには、まず個人の知識を向上させること以外に他の方法がない」と言いながら、しかし、朝鮮は家庭教育を担う女子教育が発達していないため、女性にも普通教育を奨励しないといけないと強く求める。そして、朝鮮文化のためには、一般の人々に対して常識や精神の向上のため、新聞や雑誌、外国の講義録、偉人の伝記などの読書を奨励すること

も挙げている。また、西洋人や日本人による学校教育が多いことで生じる朝鮮人の状況に合わない教育制度の改善や宗教教育の重要性も合わせて強調しており、社会事業や文化事業をより徹底にすること、最後に、何より各個人の社会に対する責任の自覚を通じて朝鮮文化運動は成功すると述べている。

崇正学校の教師である金善も、一般父兄や夫の「病的人生観」から生まれる「男尊女卑論」を批判しながら、男女平等を実現するには早く女性にも「ある程度までは自由意思に任せ、知識を得て学ぶようにし、社会的観念と光明の道を見つけられるような宗教を信じさせる」ことが必要だと主張する。女子教育の必要性は、「幼児養育と婦人」（朴順実・中央幼稚園教師）や「女兒に文化政策」（李景華・女子高等普通学校教師）にもみられるように、育児や子育てに関する記事でも強調されている。

〈表 2〉『東亜日報』連載記事「新人女流の気焰」（一）～（十六）

	著者名	所属	記事題目	掲載日付
一	金美理士	朝鮮女子教育会会長	一千万の女子に新しい生命を与えたい	1921.2.21
二	金活蘭	梨花学堂教師	文化運動に対して（一）	1921.2.22
三	金活蘭	梨花学堂教師	文化運動に対して（二）	1921.2.23
四	金元周	雑誌『新女子』主筆	近來の恋愛問題	1921.2.24
五	林培世	梨花学堂教師	音楽と人生の関係	1921.2.25
六	羅蕙錫	女流画家	絵画と朝鮮女子	1921.2.26
七	李元任	—	新女子と結婚生活（一）	1921.2.27
八	李元任	—	新女子と結婚生活（二）	1921.2.28
九	劉賢淑	中央礼拝堂	婦人と社会事業	1921.3.2
十	朴敬熙	貞信女学校舎監	寄宿舎生活の必要	1921.3.3
十一	金 英	—	婦人と経済観念	1921.3.4
十二	安寿敬	女医	迷信と衛生思想	1921.3.5
十三	朴順実	中央幼稚園教師	幼児養育と婦人	1921.3.6
十四	李景華	女子高等普通学校教師	女兒に文化政策	1921.3.7
十五	崔雪卿	—	凌侮、誘惑、迫害	1921.3.9
十六	金 善	崇正学校教師	教育へ、宗教へ—朝鮮女子の向かうべき二つの道	1921.3.10

『東亜日報』は1926年1月1日～3日にも「新年を迎えて私の希望と抱負—新しい朝鮮のお母さんたちのお言葉」という新年記念特集を組み、各界の新女性たちからのメッセージを伝えている。その大半は女教師であり、内容も主に女性の自覚・自立と実際の運動、そしてそのための教育の必要性を訴えるものである（〈表 3〉参照）。ここで特に目を引くのは、崇正学校の金善が教育の重要性を強調する上で、女学生たちに対して朝鮮人としての精神を忘れないように求めている次の文章である。

他の国は裕福なのに我々はどうしてこんなに貧しいのか。その原因はどこにあるのか。それをまず知らなければならず、それを知るためにはただ学ぶしかありません。またもう一つ

新年に我が朝鮮女子学生たちをお願いしたいのは、勉強をする時も、裁縫をする時も、体操をする時も、音楽をする時も、私自身は朝鮮の娘であるということを忘れないようにしましょう。もし皆さんから「朝鮮の娘」という精神、朝鮮人という精神を外すと、すべての学識やすべての知識、技能、技術が全部無意味なものになってしまうのです。

このような論調は、淑明女子高等普通学校の成義敬が「私の学校には今私のような朝鮮人女教員が8人もいます。(中略)私たちが私たちの手で朝鮮人を教えるということが何よりも嬉しくて、満足している点です。これが私の昨年1年間に対する感想といいいましょか」と述べながら、朝鮮が世界各国で話題となっている婦人運動や参政権の議論についていくためには、何より学びが優先されるべきだと語っているところにもうかがうことができる。また、同年5月25日から6月20日にかけて『時代日報』に連載された「女流教育家の生涯と抱負」(〈表4〉を参照)に、学びの目的が朝鮮民族を救うためだと、梨花女子専門学校の大半の学生たちが認識しており、それ故社会が女子専門教育により力を入れるべきだと言う同校の金活蘭の話もその延長線上にあるものだといえる。このような語り方は、当時の知識人たちの文章に多く見られる論調として、新聞のみならず、雑誌に新女性が執筆した文章にも共通して表れている⁵⁷。

〈表3〉『東亜日報』連載記事「新年を迎えて私の希望と抱負—新しい朝鮮のお母さんたちのお言葉」(一)～(三)

	著者名	所属	記事題目	掲載日付
一	孫貞圭	京城女子高普教諭	実際運動、何より必要	1926.1.1
一	劉英準	梨花学堂教医	綺麗に生活できたら	1926.1.1
二	成義敬	淑明女校教師	偽善はやめ、そのためには教育	1926.1.2
二	韓小済	女医	いっそうの向上のためアメリカへ	1926.1.2
二	金 善	崇正学校	励んで学び、皆学びましょう	1926.1.2
三	朴仁徳	培花学校	夢から覚めよう、個性の自覚を	1926.1.3
三	金美理士	朝鮮女子教育協会	実業教育機関を設置して	1926.1.3

〈表4〉『時代日報』連載記事「女流教育家の生涯と抱負」(一)～(九)

	著者名	所属	記事題目	掲載日付
一	金活蘭	梨花専門学校教授	外国語原書で無くした精力の消耗	1926.5.25
二	金活蘭	梨花専門学校教授	朝鮮民族を救うのが学びの目的	1926.5.26
三	林順分	京城女子高等普通学校教師	健康な精神は健康な身体へ	1926.5.27
四	金美理士	槿花女学校	実地の人材をつくりだそう	1926.5.28
五	成義敬	淑明女子高等普通学校教師	白衣を着た女子に感激を感じながら	1926.5.30
六	金貞恵	開城貞和女高校長	将来は高等科増設計画	1926.6.3
七	金永順	貞信女学校舎監	農村教育に重点を置こう	1926.6.4

八	朴仁徳	培花女学校	英語研究に一生涯を捧げる	1926.6.5
九	金鍾春	同徳女学校	朝鮮衣服の改良を主張	1926.6.20

上記の〈表 2〉～〈表 4〉もそうであるが、当時女教師たちが雑誌や新聞等に投稿した内容は、女性の教育や地位の向上のみならず、衛生や健康のための生活習慣の改善⁵⁸から経済・職業⁵⁹、料理やファッション⁶⁰にいたるまで多種多様である。なお、『新女性』『女性』や『別乾坤』などの雑誌には女教師に対する評判記⁶¹がよく掲載されており、女教師（特に独身）の結婚や恋愛に関する記事⁶²も多く扱われていたことから、当時女教師に対する関心は高かったようにみられる。

おわりに

植民地期朝鮮における女教師という職業は、「比較的高級の職業」であり、女性の職業の自由が限られている中、教員という職業は比較的早くから女性にも開かれており、人々から大いに「尊敬」される職業であった⁶³。それは言い換えれば、当時女教師の持つ社会的影響力が少なからずあったともいえよう。

これまで考察してきたように、実際植民地期の朝鮮人女教師は公私立を問わず、学校の業務以外に、多様な活動を行っていた。公立普通学校の女教師は、本務の傍ら、不就学児童や地域住民に対する日本語教育や社会強化を任されており、過重な業務を吐露する声もあった。一方、私立学校の女教師も、本務の傍ら、学校外の諸団体の活動に参加し、子どもや女性に対する識字教育や啓蒙活動を行っていたものの、その関わり方は公立学校とは違って、自主的なものであったといえる。また、女教師たちは新聞や雑誌等への執筆活動を通して女性の地位向上や意識変化にも努めていたが、一方、当時の新聞がリーダー的な女教師の近況や活動、そして女教師たちの関わっている女性団体の動向についても随時紹介していたことから、女教師に対する社会の関心とともに、女教師の社会への影響力も窺うことができる。

しかし、正規学校の朝鮮人女教師は 1943 年現在 8 千人弱で非常に少なく、多くの不就学児童や女性の教育を担ったのは、私設の教育施設で教えていた女性たちである。この私設教育施設における「女教師」についての研究はまだ十分とはいえない。とりわけ、欧米から来た基督教宣教師が設置したデイ・スクールだけではなく、夜学や講習所はもちろん、日曜学校や聖經学校といった基督教系独自の社会教育活動に関する考察はあまり行われていない。それに関する研究は今後の課題としたい。

* 本研究は、公益財団法人ヒロセ国際奨学財団の研究助成によって行われたものである。

注（◎は韓国語文献）

1 ◎「女教員不足問題—教育家希望する女性に—」（傍点は原文のまま）『東亜日報』1928 年 12 月 7 日。

2 金富子『植民地期朝鮮の教育とジェンダー—就学・不就学をめぐる権力関係—』世織書房、pp.112-113、p.373。

3 同上、p.370。

4 同上、p.369。

5 拙著「植民地期朝鮮における夜学と女性の学び—夜学経験者のオーラルストーリーをもとに—」『アジア教育』第 10 巻、アジア教育学会、2016 年、pp.17-18。

- 6 朴永奎「植民地朝鮮における教員養成—師範学校出身者を対象とする聞き取り調査を中心として—」『九州教育学会研究紀要』28、2000年、pp.293-299；「京城女子師範学校について—卒業生のアンケートを中心に—」『九州教育学会研究紀要』29、2001年、pp.259-266；「植民地朝鮮における教員養成—大邱師範学校を中心に—」『九州教育学会研究紀要』30、2002年、pp.235-242；「植民地朝鮮における教員養成—師範学校生徒の出自と招聘教員を中心に—」『アジア教育史研究』12、2003年、pp.38-55；「植民地朝鮮における教員養成体制の整備—臨時教員養成所を中心に—」『国際教育文化研究』4、2004年、pp.35-46；「植民地朝鮮における日本人教員—招聘教員を中心に—」『九州教育学会研究紀要』36、2008年、pp.63-70。
- 7 山下達也『植民地朝鮮の学校教員—初等教員集団と植民地支配—』九州大学出版会、2011年。
- 8 ◎金広珪「日帝強占期における朝鮮人初等教員施策研究」ソウル大学博士学位論文、2013年。
- 9 ◎チャン・インモ「朝鮮総督府の初等教員政策と朝鮮人教員の対応」高麗大学博士学位論文、2018年。
- 10 ◎パク・クァンスン「1920年代日帝の本国と植民地朝鮮における中等教員養成制度の運営」忠北大学教育大学院修士学位論文、2018年。
- 11 山下達也、前掲書、pp.43-58、225-261。
- 12 ◎イ・ミョンソン「植民地近代の『新女性』主体形成に関する研究」梨花女子大学博士学位論文、2003年；朴宣美『朝鮮女性の知の回遊—植民地文化支配と日本留学—』山川出版社、2005年；◎カン・ジョン「車美里士の近代女性教育活動に関する研究—1920年代を中心に—」韓国外国語大学修士学位論文、2010年；◎金成恩「1930年代黄愛徳の農村事業と女性運動」『韓国基督教と歴史』第35号、2011年9月、pp.141-180；井上和枝『植民地朝鮮の新女性—「民族的賢母良妻」と「自己」とのはざままで—』明石書店、2013年；◎金成恩「新女性方信栄の業績と社会活動」韓国女性史学会『女性と歴史』第23集、2015年、pp.203-244；◎王璨「金活蘭の社会改造論と女性教育思想」韓国学中央研究院修士学位論文、2016年など。
- 13 ◎金光植「朝鮮仏教女子青年会の創立と変遷」『韓国近現代史研究』7、1997年、pp.99-129；◎千和淑「日帝下朝鮮女子基督教青年会研究」国民大学博士学位論文、1996年；都築継雄「朝鮮女子教育会の社会教育活動」『東アジア社会教育研究』No.6、2001年、pp.184-200；◎菅原百合「1920年代の女性運動と権友会」延世大学修士学位論文、2003年；◎パク・スギョン「1920年代前半朝鮮女子教育会の教育理念と活動」韓国教員大学修士学位論文、2005年；◎チョ・キュテ「日帝強占期ソウル地域の天道教女性団体の組織と活動」『郷土ソウル』第70号、2007年、pp.119-152など。
- 14 朴宣美「帝国の女教師たち—朝鮮で教えた女教師たち—」江藤秀一編『帝国と文化—シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで—』春風社、2016年、pp.322-362。
- 15 李省展『アメリカ人宣教師と朝鮮の近代—ミッションスクールの生成と植民地化の葛藤—』社会評論社、2006年；朴宣美「朝鮮におけるアメリカ・プロテスタント宣教師による女子教育—米国南長老教会朝鮮ミッションを中心に—」『歴史人類』第43号、2015年3月、pp.103-126；朴宣美「朝鮮に渡ったアメリカ・プロテスタント女性宣教師—アメリカ北部メソジスト監督教会海外女性伝道協会を中心に—」『歴史人類』第46号、2018年3月、pp.56-74。
- 16 朴宣美「植民地朝鮮に渡ったコロニアルミッションナリー—日本人女教員を中心に—」『史林』第97巻第1号、2014年、pp.171-203。
- 17 朴宣美、2016年、p.326。
- 18 朴永奎、「植民地朝鮮における女性教育—師範教育を中心に—」『国際教育文化研究』Vol.3、2003年6月、pp.44-47。
- 19 高橋濱吉「女教員論」朝鮮初等教育研究会『朝鮮の教育研究』134号、1939年、pp.7-9。
- 20 朴宣美、前掲書、2005年、pp.135-136；◎チェ・キョン「1920-30年代アメリカ留学女性知識人の現実認識と社会活動」西江大学博士学位論文、2011年、pp.121-124。
- 21 ◎金成恩、前掲書、2011年。
- 22 金美理士は、旧姓は「車」であるが、10代に結婚し、夫の姓を使って金美理士で活動するようになる。しかし、1937年になってから旧姓の「車」で活動するようになる。◎ハン・サングオン「日帝強占期車美理士の民族教育運動」『韓国独立運動史研究』第16集、2001年p.342。

- 23 同上、pp.339-437。
- 24 朴宣美、前掲書、2016 年、pp.335-339。
- 25 拙著『韓国社会教育の起源と展開—大韓帝国末期から植民地時代までを中心に—』大学教育出版、pp.82-106。
- 26 山下達也、前掲書、pp.239-241。
- 27 ◎「婦人夜学会」『毎日申報』1921 年 8 月 1 日。
- 28 ◎「新南川小学校—婦女夜学好績」『毎日申報』1938 年 11 月 17 日。
- 29 ◎「慶源公普女子夜学会」『毎日申報』1926 年 11 月 19 日；◎「鏡城公普校に婦女夜学会」『東亜日報』1933 年 11 月 15 日；◎「儒城公普で主婦夜学会」『東亜日報』1933 年 12 月 7 日；◎「延上公普校婦女夜学開催」、「清津公普の冬期婦女夜学」『毎日申報』1934 年 1 月 29 日；◎「谷城に婦人夜学会」『毎日申報』1936 年 9 月 19 日など。
- 30 ◎「女子募集勧誘」『東亜日報』1925 年 2 月 16 日。
- 31 松月秀雄「朝鮮の青少年教育」『教育思潮研究』第 13 巻第 1 輯、1939 年 6 月、p.369。
- 32 ◎「谷山公普校卒業生指導」『東亜日報』1931 年 6 月 25。
- 33 ◎ 金三斗「初等学校に於ける社会的教育の指導」『文教の朝鮮』1928 年 9 月。
- 34 ◎キム・キョンミ「日帝下の私立中等学校の位階的配置」『韓国教育史学』第 26 巻第 2 号、2004 年 10 月、p.32。
- 35 都築継雄、前掲書、pp.185-186。
- 36 ◎金美理士「新進女流の気焰：一千万の女子に新しい生命を与えたい」『東亜日報』1921 年 2 月 21 日。
- 37 ◎ハン・サングォン、前掲書。
- 38 泰和女子館は、1921 年、アメリカメソジスト女性宣教師によって設立された女性のための社会事業機関として、館内には宗教部・医薬部・乳児部・社会部・教育部・図書部・児童部の 7 部を設置し、聖經学院、幼稚園、料理や裁縫教室、図書縦覧室、託児所、夜学などを運営していた。
- 39 ◎「知識階級女子で望月倶楽部組織」『時代日報』1926 年 5 月 8 日。
- 40 ◎「世界職業婦人協会と連絡するため、婦人団体望月倶楽部を職業婦人協会へ変更」『東亜日報』1932 年 12 月 19 日。
- 41 井上和枝「新女性朴仁徳における『近代』・『民族』・『ジェンダー』・『親日』」『国際文化学部論集』第 12 巻第 4 号、2012 年 3 月、pp.286-288。
- 42 孫貞奎は、朝鮮政府が最初に設立した女子中等学校（官立漢城女子学校）、朝鮮総督府の直轄となった女子中等学校（公立京城女子高等普通学校）、そして日本内における女子の最高学府である東京女子高等師範学校第六教員臨時養成所で教育を受けた後、朝鮮に戻り、母校の京城女子高普校で 1941 年まで女教師として勤めたが、1920-30 年代に朝鮮女子青年会を立ち上げ、講演会等の啓蒙活動を行うなど、私立学校の女教師と同様、学校外での社会活動にも積極的にかかっていた。朴宣美、前掲書、2016 年、pp.352-354。
- 43 ◎「朝鮮女子学院、養賢女校へ革新」『中外日報』1930 年 4 月 9 日
- 44 ◎金静延「〈権友会〉研究」梨花女子大学修士学位論文、1996 年。
- 45 ◎「女子労働夜学—在京女子基督教青年会連合主催—」『東亜日報』1925 年 2 月 16 日
- 46 ◎「春川英語夜学会」『東亜日報』1920 年 6 月 17 日。
- 47 ◎「釜山鎮婦人夜学会」『東亜日報』1921 年 7 月 10 日。
- 48 ◎「三氏の教育熱」『東亜日報』1924 年 4 月 27 日。
- 49 ◎「谷山桃李洞の婦人夜学盛況」『東亜日報』1932 年 1 月 13 日。
- 50 拙著「植民地期朝鮮の夜学教師に関する一考察—1930-40 年代の夜学経験者のオーラルヒストリーをもとに—」『生涯学習・キャリア教育研究』第 14 号、2018 年 3 月、pp.29-30。
- 51 崔誠姫『近代朝鮮の中等教育—1920-30 年代の高等普通学校・女子高等普通学校を中心に—』晃洋書房、2019 年、pp.246-281。
- 52 ◎「千五百啓蒙退院活動—第 3 回学生啓蒙運動！各地多淫消息【其の二】」『東亜日報』1933 年 7 月 29 日。
- 53 ◎「千五百啓蒙退院活動—第 3 回学生啓蒙運動！各地多淫消息【其の三】」『東亜日報』1933 年 7 月 30 日。

54 同上。

55 同上、1933年7月29日。

56 拙著、前掲書、2019年、pp.34-35。

57 ◎兪珏卿「我々の期待する新女性」『青年』第6巻第10号、1926年12月、pp.3-6；◎金美理士「私にもし青春が再び訪れるとしたら、このような仕事をしよう。実践教育に努力」『別乾坤』1929年6月、p.59；◎朴仁徳「朝鮮社会と壮年教育論」『三千里』第7巻第5号、1935年6月、pp.112-118、127。

58 ◎「革新原理の黄金律、諸家の生活スローガン」（『東亜日報』1936年1月1日）に兪珏卿（女子基督联合会）、孫貞奎（京城女高）、宋今璇（同徳女高普）がそれぞれ生活習慣の改善に関する文章を寄せており、進明女高の韓姫命が「わが生活改善は数字から」、槿花学院の李瓊完が「主婦として努力すること」という文章を女性雑誌『新女性』（第3巻第1号、1925年1月）に書いている。

59 ◎朴仁徳「朝鮮女子と職業問題」『ウラキ』第3号、1928年4月；◎黄愛徳「朝鮮女子経済運動の系譜」『青年』第10巻第5号、1930年；◎黄信徳（京城実践女学校）「職業婦人会と職業婦人倶楽部」『新家庭』1934年7月。

60 ◎方信栄（貞信女学校）「栄養講和」『東亜日報』1927年5月25-26日；◎黄信徳「婦人運動の立場から見たファッション・ショー」『新家庭』1934年8月。

61 ◎「京城各女学校の評判の良い女先生たち」『別乾坤』第2号、1926年12月。

62 ◎「ソウル独身女教員名簿」『三千里』1936年6月；◎「朝鮮女性の未婚知識層はこのように答える」『女性』1939年10月。

63 ◎「稼ぐ女子職業探訪記（15）一家に入っても洞里に出ても尊敬される女先生（上）一」『東亜日報』1928年3月10日。

Female Teachers' Social Educational Activities in Colonial Korea

Jeongyun LEE (Research Fellow of the Center for Lifelong Study and Career Education, Associate Professor University of Tokyo)

There are very few studies of female teachers in colonial Korea, especially those of Korean female teachers. Furthermore, only fragmentary research has been conducted on female teachers' activities outside school, in other words, on social education activities. There are three types of female teachers in colonial Korea. 1. Women's missionaries from Europe and the United States; 2. Japanese female teachers who came from Japan, and 3. Female teachers trained in Korea.

This study focuses on the actual situation and the role of Korean female teachers trained in Korea. In particular, this study clarified one aspect of the female teacher group in colonial Korea by considering female teachers' social education activities.

First, female teachers at public schools were forced to work on Japanese language education and social reinforcement for children and local residents alongside their main duties.

Secondly, female teachers at private schools (primarily secondary schools and mission schools) voluntarily participated in the activities of organizations outside the school alongside their main duties, while also conducting education and enlightenment activities for children and women.

Third, the number of female Korean teachers who worked in regular schools is very small, at about 8,000 as of 1943. Many out-of-school children and women were educated by female teachers who taught at private educational facilities (night schools, training schools, Sunday schools, bible schools, etc.).